

# 綱渡り 日本経済

菊池 英博

文京学院大学教授

## 格差社会米国で移民を 救済する日本人金融マン

マイクロクレジットは  
反「現代経済学」

昨年のノーベル平和賞は、パン  
グラデシユのムハマド・ユヌス氏  
(66)と、同氏が創設し総裁を務  
める「グラミンバンク」(村落銀  
行)が受賞した(本誌2006年  
11月21日号、福永正明氏寄稿論文  
参照)。同氏が考案したマイクロ  
クレジットとは、貧困層や低所得  
層に対する小口の貸し出し(クレ  
ジット)のことで、現在の経済学  
をベースとする金融機関の理屈で  
は、到底貸し出しできないような  
信用度の低い人々を対象として融  
資する方法である。経済学の理論

では「担保があることが原則、金  
利は信用が低いほど高い」という  
ことだ。これでは最貧層を全く救  
済できない。グラミンバンクの方  
針は、現代経済学の逆発想であり、  
「担保のない人、資産を持たない  
人、しかし事業熱のある人」なら

小口でリスクが多くても貸し出す  
という逆発想を成功させているの  
である。

「こんな小さい肉さえ半年に一  
回すら食べられないのか」

ムハマド・ユヌス氏が開発した  
マイクロクレジットと同じ問題意

識をもって、ワシントンで中南米  
移民を対象として少額の金融サー  
ビスを、低い手数料で開始してい  
る日本人がいる。枋迫篤昌氏  
(53)である。同氏は大学卒業後、  
旧東京銀行に入り、語学研修生と  
してメキシコに留学した。スベ  
イン語の勉強をしながら、道端でタ  
バスターを売る人と仲良くなり、  
食事に招いてもらった。夕食に出

されたのは薄いスープと3枚のト  
ルティーヤ、唐辛子と豆を煮たも  
のだった。食後の談笑を終えて帰  
ろうとした時に、その家の2、3  
歳の息子が同氏に、「お兄ちゃん、  
今度はいつ来るの。お兄ちゃんが  
来てくれたから、半年ぶりに肉が  
食べられた」と言い、再会を懇請  
した。これを聞いて同氏は「あんな  
小さな肉でさえ、半年に一回す  
ら食べられないのか」と思い絶句  
した。

この時、同氏は金融のプロにな  
って貧しい人が少しでも幸福にな  
れるように働こうと固く決意した  
のである。

同氏は銀行で為替のディーラー、  
コンピューターシステム、シンジ  
ケートローンなど、幅広い国際金  
融のベテランとなり、多くの実績  
を残した。2000年からの3年  
間は東京三菱銀行のワシントン駐  
在員事務所長を務める傍ら、「ど  
のようにしたら中南米移民に低い  
手数料で迅速な金融サービスを提  
供できるか」を検討し、初心を貫



米国で中南米系移民向けマイクロクレジット  
事業を展開するMFICの枋迫篤昌氏

徹して、2003年6月に株式会社「マイクロファイナンス・インターナショナル・コーポレーション」(MFIC)を設立した。同氏はワシントン在勤中に、ジョージ・ワシントン大学で経営学修士を取っている。

## 「銀行口座なしの移民」3000万人

米国には5000万人のラテンアメリカ系移民がいる。このうち、3000万人が「UNBANKED」と呼ばれ、銀行口座を持ってないのである。こうした移民は給料を小切手でもらうと、移民の金融や送金を手掛ける大手数社の金融会社に持ち込み、現金化と本国への送金を依頼する。小切手の現金化だけで3~5%、本国への送金で10%、さらに本国の手数料5%を取られるので、汗水たらして働いても、本国で待つ家族は稼ぎのわずか80%程度しか受け取れないのである。しかも、本国の家族は山奥に住んでいるから、銀行口座

を持っていない。だから家族が「虎の子」を受け取るには、何日もかかる。米国で銀行口座を持っていない移民は信用がないので、自動車ローンすら借りられない。

## 最新の金融技術を使えば移民に信用を

伝統的金融手法と米国の諸規制のコンプライアンスが100%達成できる最新のIT(情報技術)による金融システムを駆使すれば、移民が必要とする金融サービスを安い手数料で提供できる。MFICは中南米10カ国のマイクロファイナンス金融機関と提携している。米国移民はMFICに現金を持参して送金でき、母国の家族はMFICの提携金融機関に向いて送金を受け取れる。本国への送金は手数料10ドルで、5分以内に本国の銀行で引き出せる。サービス開始から2年で年間送金取扱額は2億ドル、顧客数は米国内で5万人に達して口コミでどんどん増えている。送金手数料は一件当たり10

ドルの固定料率で、大手数社の10%よりはるかに安い。

米国は信用社会であり、移民が信用調査報告書(クレジットリポート)を持たないと自動車ローンは「クレジット・ヒストリー・ローン」という商品を開発し、移民に「クレジットを作るために300ドル程度の少額を借入れなさい。それを完済すれば信用調査報告に掲載されます」と言って推奨している。このローンを返済して「信用できる人」という報告書が得られれば、移民は中古車を買うためのローンを受けることができ、住宅ローンも可能になる。

## 85カ国へ広がるMFIC 日本人は弱者の味方

MFICは今年1月から、アラブ首長国連邦所在の世界第3位規模の送金会社UAEエクスチェンジと提携し、従来の中南米10カ国から一挙に85カ国に送金サービスを拡大する。これによって総合的

なマイクロファイナンス・サービスを世界中に展開する基盤ができたことになった。

枋迫氏は「世界中に広がる出稼ぎ移民の人たちに提供する金融サービスのありかを示したい」と思う。この分野はまだ未開発で、MFICをビジネスモデルとして多くの人が参加し、起業してほしい」と熱意のほどを示している。

一人の日本人金融マンが、格差社会アメリカで移民に総合的な金融サービスを提供できる会社を立ち上げ、大成功していることは、我々日本人の誇りである。出資者80人のうち70人が日本人であり、これは本来、弱者の味方である日本人の心を表していると言えよう。



米国で銀行口座を開かず不利を被る中南米系移民が多数来店する「ALANTE」(太陽の店)